

## 私を救った手

岩井彩香

全国心臓病の子どもを守る会奈良県支部

### The Hand That Saved Me

Sayaka Iwai

Association for the Protection of Children with Heart Disease in Nara Prefecture

私は多脾症候群で、心内膜症欠損症で生まれ11ヶ月で根治手術を受けました。今は投薬と経過観察を行なっています。また、側湾症でもあり、小学校高学年からコルセットを着け始め、18歳1月末には大阪労災病院（独立行政法人労働健康安全機構）にて、岩崎先生、岡本先生の手術を受けました。結果、心臓の手術痕20cmが前に、背骨の手術痕45cmが後ろにあります。けれども、ぱっと見では全くわかりません。“普通”の健常者です。生活も体に気をつけながら大学に通っています。

2年前の3月のことでした。心臓の手術をして下さった岸本先生は、病院をすでに退職されており、一年に一回診察をしに地方独立行政法人大阪府立病院機関大阪母子医療センター（以下、母子センター）に来て下さっていました。母子センターは私が生まれた場所であり、手術を受けた場所であり、母のお腹にいる時から20年間通い続けている病院です。診察が始まり、お話をしていると、岸本先生は「母子センターで診察するのは、今日で最後」と教えて下さいました。あまりに突然のことでびっくりし、戸惑いました。

その時、最後に握手をして下さいました。握手をした瞬間、私は「この手が私を救って下さったんだ。私は岸本先生の手のおかげで、今生きているんだ」ということを思いました。分りきってることと言えばそうなのですが、これまでの20年間のこと、言葉にできない想いが溢れてきました。一緒に写真を撮って頂きました。私のお気に入りの写真です。その日は、いつもは一緒に母も仕事で、1人で病院に来ていました。ずっと母に付いていくのがやっとな

りも出来なかった私が、今こうして1人で病院に来て、先生と握手していることが、本当に奇跡だと感じました。

最後にお礼をして先生と別れました。診察室を出た瞬間、私の目からは大粒の涙が溢れて止まりませんでした。先生のことを思い出すと、今も自然に涙が溢れてきてしまいます。

母子センターは、小児専門の病院で、いろんな子ども達が来ています。みんな必死に生きようと、そしてお母さんお父さんが自分の子に生きてもらおうと、必死になっています。小児専門の病院で、1人だけ大きな私がいると目立ちます。一見何も無く普通に歩いているからです。けれども、私は医学の進歩があつて、先生がいて、必死になってくれる親がいて、生きることができている。病院にいる子ども達、お母さん達に、「大丈夫だよ、きっと私みたいになれるよ、」って伝えればいいなと思っています。

今は主治医であった稲村先生が母子センターから近大狭山病院（近畿大学医学部附属病院）に移られたので、そちらに通っています。未だ私は小児科の受診にかかっています。

医学の進歩により心臓病の子ども達が生きることができるようになりました。そして生きて来た子ども達がいま、大人の領域に入る時代になりました。この時、どこの診療科に受診すればいいのでしょうか？今まで見て貰っていた小児科はとても安心しません。しかし、体はもうすっかり大人で小児とは言えません。私はその境界線に立っています。これから生まれる子どもたちが歩きやすいように道を作るようにしたいです。私は、大学で精神保健福祉士を目

指して勉強しています。この資格を取得し、困っている子ども達とお母さん達を支えられる仕事に就きたいです。